

かがり火 H大師の教え

院長からのメッセージ

探究する皆様へ、『かがり火』は短い本ですが、そのメッセージは深遠なものです。この本は、一人一人の注意を自らの神聖な本質へ向かわせる教えを伝えています。「外で見るものは、必ず内にもある。手近な所に、つまり自分の家庭や交際範囲には、正すべき不正があり、苦しんで癒しや慰めを必要とする人がおり、指導を受けるべき子供がおり、そしてもっと広い意味で言えば、まだ普遍的な愛の振動に調子を合わされていない同胞愛の豎琴の弦がある限り、そこにこそあなたの義務がある」と本書に言われている通りです。手近な事を心の底から受け入れるために、この教えは私たちに大きな力を授けて下さいます。そのおかげで、内なる「神」との絆を見つけながら、日常の「些細な事」との深い繋がりも発見します。生活のすべては突然、新しい輝きに満ちあふれてきます。

エレナー・L・シヤムウェー

人民の寺院・院長

目次

序

第一章 文明の転換期

第二章 生き方を学ぶ

第三章 感覚と接触

第四章 永遠なる愛

第五章 苦と犠牲

第六章 小さなことの力

注

訳者解説

序

「弟子よ、渴きで苦しんでいる汝の魂に明け方の露を浴びさせよ」とファウストは言う。しかし、毒気の漂うぬかるみをとぼとぼと歩き、腐りかかった落ち葉を踏んで暗い森を通り抜けている私達は、夜明けの光がさしこむ陽だまりへ辿りつくまで、どうやって浴びることができようか。夜明け前の山頂は日の光で輝いているが、麓ふもとの私達はその光でどうやって進むことができようか。人類の兄たちが遠い昔からかがり火を灯したあの山頂の光である。

私達は皆、天と地が一体となる遠い地平線に目を向けた時に、高くそびえるその山頂の光を一瞥いちべつしたことがある。しかし、しばらくすれば私達は目を下げ、足下の泥を見、臆病のためか、怠慢のためか、日光を浴びる山頂に登ろうとする気をなくする。そうすると、私達は変化の乏しい月並みな生活に陥ってしまう。たとえ私達たちが、その生活を「代わり映えのない退屈な日々」と軽蔑したとしても、とにかく、無為に日々を過ごすことに慣れてしまっている。

私達現代人はなぜ精神的な生活を送ることができず、また、送ろうとすらしめないのか？ それは、「合理的」と自称するこの月並みな時代には、霊的なことが非現実的で幻影のように見えるからではないだろうか。あるいはむしろ、霊的なものが自然にみえてくるように、心の「自然な」部分が「霊的な」段階まで高まることを私達は許さないからではないだろうか〔注1〕。私達は「道と真理と命」〔注2〕について教えられたことがないというわけではない。しかし、私達は哲学の真理を「思想」として分析しているだけであり、それを単なる理論や観念とみなし、日常生活に活用できる実際的なものであると信じなくなってきた。知性だけでは、決して内的な真理を把握することはできない。ハートの光に照らされることによって、知性は真理を理解することができる。

「思考」を自ら身に着けた魂には、必ず「懐疑」という黒い雲が降りてくる。その人の「思考」は、知性あるじの王国の主となり、中央の玉座に腰をかけ、人生の波に打ち上げられた漂流物を分析し、分類する。その知性は心静かに座り、外科医のメスのような冷たさで、震える神経の中に人間の苦痛の源を探し求める。しかし早かれ遅かれ、苦痛の冷酷な手はそのスティックな魂を捕まえる。すると、その人は広大な宇宙で自分がどこにいるか分からなくなり、動くこともできず、自分が落ち込んだ地獄でもだえ苦しみ続ける。

その時、平然と苦しみに耐えた精神や分析力、自分で作り上げた静かで安全な砦はどうなっただろう？ 大天使が現れ、魂をエデンの園から追い出してしまった。そして、天使の燃える剣のために、人は自由に出入りすることができなくなっている〔注3〕。その人に残されたのは、これまで身に着け

てきた忍耐力だけである。なぜなら、彼は、幻影を取り除き真実を呼び起こすことができる唯一の「王権しやくの笏」である信仰を、無価値のものとして捨ててしまったからである。

信仰のある人は、大変な苦痛にさいなまれている間も、「私の意ではなく、天意が行われますように」〔注4〕と祈るだろう。信仰があれば、赤々と燃える地獄の炎の中にも、招き寄せる神の指をはっきり見えるだろう。まことの信仰は、靈的智慧を予感することであり、かすかではあるが智慧の最初の認識である。魂が「考える」ことだけではなく、「感じる」ことも学んだ時、信仰は靈的智慧ちえに変わってゆく。

人生の表面しか見ない冷たい物質主義を否定し、目に見えるものの秘められた原因を探し、「不死性に至る狭き古き道」に入ろうと切望する人に、この本を捧げる。その人たちが本書の文章で助けと勇気を見つけてくれれば、という願いをこめて。私は著者というよりも編集者である。本書は、多くの人たちに「ヒラリオン」という名前で知られている大師が述べてくださった言葉を、私は暗記して書いたノートから集めた資料だからである。

この方の他の本〔注5〕をご覧になり、大師の姿に興味のある読者のために、彼の風貌を描写しておこう。まず、背の高い、筋骨たくましい、正直で男らしい顔の持ち主を想像してほしい。彼の大きな黒い目の深みから火花が出るように見える。口はやや大きめだが、唇が繊細で、くつろぐ時には優しく、ほとんど女性的な表情である。波打っている髪は深い赤褐色で、日光のもとで金色に輝く。彼の手は美しく強く、しっかりした握手は純粋な力の感覚を伝える。声は太くて円やかだが、優しく静かな思いやりを表すこともある。

これは力強い偉大な魂の風采である。大師の唯一の人生目的は、人類の精神的再生を起こすことなので、いつも一般大衆の擁護者として庶民の権利を主張し、既存の弊害を直される。しかし同時に、まことの神秘主義を実践する方として大師は、内なる生命の真実を悟っており、人間の一人一人にいる「神」を認めることができる境地まで皆を導こうとされている。

B. S. 〔注6〕

第一章 文明の転換期

近代文明の成長・発達、ヨーロッパの中世という混沌とした初期から現代の頂点に至るまでの、はっきりした一周期と考えることができる。現在、ヨーロッパ人の数世紀にわたる激しい活動と絶え間のない進歩とによって呼び起こされたさまざまなエネルギーは、支配→抑制され得なくなり、ヨー

ロップ文明を生み出した中世よりもさらに暗い混乱状態をもたらす恐れがある。これは昔のあらゆる偉大な人種の運命であった。いわゆる文明を作ろうとするすべての努力には、好結果を相殺するほど大きな弊害の一連が伴い、結局それは文明の恵みを受けていた民族を打ち負かしてしまった。

この十九世紀末の人類は崖っぷちに立っている。現在の周期が終わりに近づくにつれて、深淵は人類を飲み込もうと口を広く開いている。現代の文明をこの苦難におとし 陥れた諸勢力は結託して、人類を打ち破ろうとしている。多くの人はあたかも、足が不自由なうえに杖も持たず、濁流に架けられた腐った橋の上を目隠しして渡ろうとしているかのようである。

科学は、現在の文明を築き上げた最大の功労者であり、初めは自然を忌み嫌う老衰した宗教に對抗するものとして現れたが、次第に唯物論に傾いてしまった。聖職者たちの考えを否定しながらも、科学は宗教団体と同じような空念仏・思想的権威主義・利己心などを吸収してきた。

科学と人類の発展に献身するふりをする利己的な偽善者たちは、名声と富をできるだけ自分たちのものにしようと企たくらんでいる。この人々の観点から言えば、科学は見事にその役を果たしている。彼らは傲慢さのあまり、ためらいもせず宇宙の基礎そのものを攻撃し、生命の木の実である信仰・愛・信頼を一般的な非難と軽蔑の対象にしている。この者たちの正体と動機を知らずに、その移り変わりやすい要求を満足させようとしてきた大衆は、無神論や虚無主義、神と人間に対する反乱という恐ろしい報いを受けなければならない。

この利己的な者たちは、自分たちには実現することができない事を次々と約束する。これらの哀れな人々は、妄想に陥り全人類に対立している。彼らは科学研究の中間期に入ったころには、さらに前進するために必要なよろい 鎧と武器を捨ててしまった。つまり、「信仰の楯」や「平静の兜」、たて 「正義の胸当」や「霊の剣」を捨ててしまったが、この事に気がついていない。しかし、これらの装備もなしに、いかなる人間であろうと、天使や鬼神でさえも、まこと 霊的領域に入り、その守護者たち戦って真の知識と力を手に入れることは決してできない。なぜなら、これらの武器はこの世の武器よりもはるかに実質的で役に立ち、永続的なものだからである。

オカルティズムは本当の科学研究に少しも反対していない。心が純粹であり、利己心のない、正直な探究者のためなら、母なる自然は彼女の素晴らしい目を開け、その瞳の深みを見せ、知識と智慧の尽きない秘宝をその人の霊的感覚器官に触れさせ、味わわせ、扱わせるのである。秘宝がこの世に軽蔑され嘲笑されるので、探究者はそれを人々に見せることはできないかもしれないが、とにかく自分の目で見たのでその価値と現実性に関して納得している。

疲れ果てた多くの巡礼者が渡ることができるように、生と死と、そして死と生の間の深淵に橋を架けようとする献身的な者たちを、オカルティズムは両手を広げて歓迎する。またオカルティズムは、神聖な目的背を向けた裏切り者たちを忘れはしない。もしそうした者たちにその報いを与えなかったなら、義務を怠り、人類に献身し真理を守るという理想を裏切ることになるからである。その者たちは数えきれないほどの人々を殺してきた。つまり、口先だけの約束をして、卑しい動機をもって人々

の胸に野心を植えつけ、彼らを拝金主義へと誘い込んだ。現代の拝金主義は、聖書に描かれた偶像崇拜への生贄いけにえよりもはるかに残酷なものである。

わずかだが、大衆の中にも霊の明かりを消さずにその光を守り続けた勇敢な者たちがいる。彼らは「精神的墮落」「不自然な成長」「病的な考えすぎ」などの軽蔑的な批判を浴びてもしり込みをせず、いわゆる「科学者たち」が与え得るいちばんよい知識を認めながら、科学の他の主張を受け入れない。

この勇者たちには、神へ、自分自身へ、そして隣人へという三重の義務がある。彼らは、真のオカルティズムとキリスト教の川が流れ込む「命の河」は、外見だけの知識という表層の下に流れ続けていることを十分に知っている[注7]。もしこの人たちが他の人々を目覚めさせ、その無知や無力を意識させることができるならば、この周期が終わる前に、皆が力を合わせて人類の敵たちの最後の攻撃を撃退する機会はあるだろう。そうすれば、周期の下向きの流れを押し上げ、黄金時代の静かな海に入ることができるだろう。言うまでもなく、周期のエネルギーを上へと向け直すその時が来れば、味方と敵は死に物狂いで戦うことであろう。しかし、真まことの戦士は新時代の素晴らしい可能性に無限の勇気を吹き込まれるに違いない。

現在、霊的な世界で同じ戦いに加わっている戦士は、自分がこの生死の闘争に勝つことができるし、勝たなければならないことを知っている。なぜなら、彼自身は「知識」そのものだからである。彼が勝たなければ、地球は粉々になり、その破片は永い時代少しずつ他の天体に降りそそぐであろう。

直観と美德の分離、知性と良心、そして科学的なエリートといわば「下層民」との分離は、国に降りかかる最悪の災難である。国際的な闘争から来る大きな混乱の中で、正義と慈悲と愛が無視され忘れられてしまう。世俗的な教育のおかげで、いわゆる教養のある階級は無感覚になっている。そうしたインテリが国民の運命について全く無関心なので、来るべき闘争で戦ってくれるとは決して彼らに期待できない。自己満足の衣を捨てて、大衆の味方となる知識人はたまにいますが、ほとんどは無理やりやめさせられるまで墮落した生活を送り続けようとする。もはや人民の意志を邪魔することができないと分かった時にのみ、彼らは避けられぬものを甘受するであろう。

文明国のほとんどの人々の生活は、この周期の初期と中期[注8]によく起きた大量虐殺や略奪、恨みをはらす血なまぐさい事件などとは全く関係がなく、違った性質の事柄に関わりがある。私達現代人は習慣的に自分の感情を抑制する。私達は昔の人々のように元気に笑えなくなったし、私達の泣き方はほとんど「精神的」といえるほど静かになってきた。

物事のうわべだけを見ている人は気が付かないかもしれないが、現代人の顔に刻まれた心の傷は昔の人と比べてはるかに深刻である。「現代人」とは、中世の騎士のような者ではなく、オフィスの椅子に座り、元帳をじっと見て、勘定を決算する事務員のことである。魂の糧に飢えている彼の顔は、隅から隅まで、心配、苦悩、抑制された感情の線が刻まれている。彼は無意識のうちに永遠の

法則の声に耳を貸し、自分に忍び寄っている厳しい運命を抗議もせずを受け入れようとする。将来、老齢に伴う麻痺が彼自身を待ち受け、救貧院や売春や貧困が彼の愛する家庭に降りかかるかもしれない。その未来のすべては、不完全に発達した体の中に閉じ込められて奮闘している彼一人の努力次第である。

伝統文化の深遠さについては度々話題に上るが、十九世紀の沈黙の悲劇と比べれば、いかに表面的で物質的なものだろうか。都会のスラム街や大聖堂の対比を見れば、天使たちでさえ泣き出すだろう。無限の生命の神秘的な歌と、宇宙の魂の恐ろしいほど深い沈黙と、過去・現在・未来という永遠の静かな流れは、果てしなく打ち寄せる海の波のようにしきりに人間を打ち続けている。そして、私たちは何とかして自分の命や自分のまわりの人たちの命を永遠の真理に結びつけようと努力している。

数世紀もの間、キリスト教を装って多くの悲惨な犯罪が犯され、イエスの御名で黒魔術が度々行われてきたが、その多くは一般的に「聖霊の力」と呼ばれる力の誤用のために起きた。その様々な罪は、物事をよく考える人たちの心の中に大きな反発を呼び起こした。その反発がはっきりと現れた時代に、人類の幸福を危険にさらす「唯物論の波」が出てきた。一時、その波は神に対する一切の信仰を押し流すところであったが、幸いにその災いは回避することができた〔注9〕。

その頃、不信仰という毒が多くの人々の心に入り込み、真まことのキリストはドグマや派閥主義で隠されてしまった。しかしそれと同時に、過去の素晴らしい宝物が掘り出され、現代人に莫大な力を与えたのだ。古代の宝物の発見を可能にした勢力は、天秤を手にしていて、次に天秤の皿が動いた時に、新しい要素が現れてきた。将来、この要素は東洋の唯心論と西洋の実用主義という反対の原理を結合させるだろう。米西戦争で合衆国の北部と南部は和解してスペインという共通の敵と戦ったように、古代の真理とイエスの真理は、霊的および物質的な科学を研究する共通の目的のために結合するであろう〔注10〕。

ドグマや宗派の主張は忘れ去られ、科学的哲学に取り換えられる時が近づいている。そして、最終的には科学的哲学もさらに偉大なものに取り換えられることであろう。

状況はすでにずいぶん変わってきているので、これから政治・工業・社会において新しい機構が生まれるに違いない。内なる世界から戦いへと呼び寄せる「闘ときの声」が鳴り響き、人類の中のあらゆる兵士は来るべき戦いのために武装している。これは遠い昔から予言された大戦であり、白と黒、善と悪との闘争である。この戦いによって世界に大変動が起こるだろう。それはまずアメリカで起こり、そして次第に他の国々へと広がって行くだろう。

アメリカでは改革的な考えを支持している多くの国民がいるので、細かい意見の食い違いを乗り越え共通の政策方針の下で団結すれば、その候補者たちが選挙で圧勝するに違いない。これがうまく行われるなら、国の舵を取り、国民の船を無事入港させる指導者が現れる時は来るだろう。すると、アデプト〔注11〕は大統領になり、資本家たちは没落し、生活必需品が平等に配布され、大企業

が政府に支配されるようになるだろう。さらに、現在のアメリカにおいて、またこれからアメリカの一部となるだろう多くの領土においても、男女平等が保証され、子供を含めてあらゆる市民が機会均等を保証されるだろう。このような偉業を成し遂げることのできる人物が、まだ公おおよけに現れていないという事は問題ではない。時が来れば、彼は現れて自分の智慧と偉大さを国民に示すことができる。

実際は、人が本質的に偉大であり、賢明であるということはない。他の人たちと比べて偉大で賢明であるにすぎない。人々は自分が悲惨な境遇にあることを認め、人民の集団的な意志が解決を求めているので、偉大な魂は機会を与えられ、一般的に「偉人」と考えられるようになっている。

国はその国民一人一人の成長により、新しい状況を作り、まことの靈的種が成長できる土壌を作る。そのようにして国は宇宙の「善法」に願いをかけ、偉大な指導者、王君、政治家の出現を要求する。「靈的種」とは、経験を求めている偉大な魂である。善法は、より低い魂たちの大きな要求で作られた土壌にその種を植えつける。

確かに、魂そのものは無限者と一体であるので、永遠に偉大なものである。しかし、魂が現れるための道具である諸媒体には、物質界とメンタル界の質料〔注12〕が必要である。それらの世界で必要な相関関係〔注13〕を作るために、その質料の振動率を上げなければならない。魂はその振動率の主音(keynote)を高めてそれを行う。

これまでの歴史において、各国が互いにこれほど注意深く警戒する時代はなかったであろう。フランス、ロシア、ドイツ、イギリス、アメリカは、息を凝こらして互いに牽制し合っている。真理・光・自由・平等の衣を着た「真まことの戦士」がどの国の首都に最初に現れるか、誰にも分からない。しかし、その方が現れるとすぐに世界の歴史は一変することを皆知かたずっているので、固唾を飲んでその瞬間を待っている。「開戦」のラッパは鳴り、昔から予言されてきた地球規模の普遍的な戦いの宣戦布告がされるだろう。

すべての国々が天秤にかけられ、その天秤はわずかなきっかけによってさえ揺れ動くだろう。過去の偉大な魂たちもこのような節目の時代に現れ、機会を捕らえたのであった。彼らは、まことの進化の路線で大いに進歩する機会を与えられ、その機会を可能にした国民、すなわち好い状況を作って「応報の法」に酬いを求めた国民を前へと連れていく。

戦争によって起こる破壊や犠牲や苦痛が物質界・メンタル界で集中して現れる時には、周期の最低点を通過しているのである。その時、まことの生命の世界において苦痛と犠牲の成果は現れ始め、新しい人類が進化きたする来るべき周期には一層の力と可能性をもってこの世に戻るであろう。

その時、偉大なる世界の母の胸から発する長く深いため息は、すでに新しい振動を呼び起こしているだろう。生み出そうとする母の陣痛の最後の痛みは、もはや苦しむ人のうめき声ではなく、新しい人種という「子供」の誕生への喜びの叫びになっている。喜びの叫びは天使の歌声と一体となり、次のように歌うだろう。

「いと高きところでは、神に栄光がありますように
地の上では平和がありますように
万人には神の恵みがありますように」〔注14〕

第二章 生き方を学ぶ

現在の人類の目はまだ閉じている。この世には、真理の断片しか現れない。しかしその断片は、値打ちのつけられないほど貴重なものである。そして、その真理をわずかでも見ることのできる人がいるということは、人類が全体としていかに進歩しているかを明らかにする。

霊的な知識を熱望する人は、「智慧の大師」というオカルティズムの教師がこの世におられることを聞くと、個人的な指導を受けたいという強い願望で胸が一杯になる。しかし、そのように求める人たちの多くは、霊的師匠に認めてもらいたいという熱望の力と、弟子になる資格とをはき違えている。霊的智慧を得るには、この世を離れ、外的な活動をいっさい放棄し、暗い密林に隠遁する東洋の修行者のように、至高者と一体となるために一日中ぼんやりと瞑想にふけなければならない、と思ひ込む人たちも少なくない。このような幻想にふける神秘主義は人生の一つの極端であり、また、西洋文明の大わらわの活動はもう一つの極端である。どちらの極端にも、まことの道を見つけることはできない。東洋のヨギは、性格が寛大で優しく想像力に富み、常に自分を捨てて全体に融合しようとしているが、しばらく西風に横たわり、活動への呼びかけを受けなければならない。つまり、その最小の部分に至るまで全体に活動を捧げる献身の道である。東西の性質を統合し、両方の欠点を取り除かねばならない。

私達が政治や倫理や宗教に形式を与えようと思えば、その形式を不当に遇するではないかと心配して恐れおののく奴隷ではなく、形式を支配する者にならなければならない。形式を変質させ私達自身の本質に同化し、形式の線を引き、その線に沿って力を送ったり受けたりできるようにしなければならない。言い換えれば、形式と一体とならなければならないのである。〔注15〕

外的な仕事、つまり様々な苦痛や試練を受けた人類のための仕事は、多くの人たちが考えるよりも必要なことである。世界が周期の最低点を回っている現在には、外的な仕事こそ外的な次元で世界を引っ張り上げようとする大いなる流れに刺激を与えるのである。

しかし、各自のハートにある愛と智慧の明かりが「大いなる炎」の火で灯されていないなら、外的な仕事は利己的で役に立たないものである。大いなる炎は灯心も油もなく燃え続けているが、それを見守る方々はある方向へ炎を吹き流す。炎を捕らえることができるのは、自分の明かりを調節しておいた人たちだけである〔注16〕。

私たちの多くはまだ子供のようであり、想像上の炎をつかもうとするだけである。しかし、他人に火を与えるために火を受けたのに、それを自分の個人的な目的のために取っておいた人は災いになる。その目的を「人類のための仕事」と言おうが「自己栄達」と言おうが、結果は同じである。野心に駆られて指導者となり、自分も歩んだことのない道の案内人となり、正しい生き方のイロハも知らずに人生の科学の教師になろうとする者たちは、昔から必ずと言ってよいほどひどい目に遭う。彼らは弟子たちの欠点につけ込み、上手にお世辞を言うことで、弟子を奴隷も同然な状態になるまで引き下げる。誠実で高潔な人でさえも、そのような偽教師の餌食えじきになりかねない。そのような偽教師に従えば、いずれ自分の熱望が茶番化され、内なる人生が汚されてしまっていることが分かるだろう。

胸の奥深くにある宝物を他人に預けてはならない。その人がどんなに高位の方だろうとそうである。もし預けてしまえば、宝物が戻ってくる時には、他人の涙とあなた自身の涙とに覆われるだろう。唯一の避難所は、自分自身の魂であるということを学びながら泣いた涙である。

しかし、どんな失敗も教訓を与え、誠実な動機があれば間違った努力もそれなりの実りがある。だが、見当違いの試みを行うならば、たびたび仲間に傷をつけることになるだろう。そして、自分が傷つけた人を嫌うのは人間の自然な感情である。本当の意味で霊的に進歩していることの最も確実な証拠は、自分がいちばん大きな傷をつけた人たちを愛するということである。

ナザレのイエスは、霊的進歩の大いなる謎を次の言葉で解決した。「この女は多く愛したから、その多くの罪は許されているのである」〔注17〕。イエスは、愛のために罪を犯した女性の魂の中に霊的な愛の種があり、その愛による絶対的な犠牲において、心のカスのすべてが焼き尽くされるまでに炉の中でじっと立ち続ける能力があることを知っていた。

善への努力には無益なものは一つもない。努力そのものが見えなくなるが、それは原因の世界に移り、種のように智慧の土に落ち、愛の水に潤わされ、ついに芽を出し花となって咲く。

宗教は死後の人間の運命を重んじて、この世の生活について十分に考えていない。生きることを学び、死ぬことを神に任せよ。死は神の関心事であり、生きることはあなたの関心事である。食べたり、飲んだり、眠ったり、微笑んだり、悲しんだりすることが生きることではない。生きるとは、知識、真理、愛、美、信仰の極致として脈々と波打つ、強烈に振動する生命である。手を伸ばし、それを魂に吸い込んでみよ。飢えた人が空腹で目の回りそうな体を養うためにパンに手を伸ばすように、生命を求めよ。

ある人たちは自分を卑下することが信心深い態度を示すと思っているが、実際のところ、それは心にもない謙遜けんそんにすぎない。全体と一体となって、全体の立場から自分の性格を判断することを学べ。そうすれば、善さや悪さに関して、自分の性格が親しく付き合っている人たちの性格とあまり変わらないということが分かる。いわば本性にニスが厚く塗られているところは、あなたは仲間よりも立派に見えるし、ニスが薄いところには劣っていると思われる。しかし、内面を見ることができれば、ほとんど同じだと分かるだろう。

善という神のような性質は、墓から神の子を復活させる法すなわち力にある。

一生懸命得ようとするものを、あまり遠くへ探し求める必要はない。強い願いによって引きつけられ、近くに見つかることが多いからである。これは需要と供給の法則の働きである。いちばん純粋な愛であなたを愛してくれる人の性格を奥深く見つめるなら、おそらく求めたものを見つけるのだろう。

どんな人の人生にも、寂しい砂漠にいるような時期がある。それを若くして経験することもあれば、年老いてから経験することもある。いずれにしても、私たちは皆足が重くなり唇がかさかさになるような辛い時期を過ごさなければならない。神様のおかげで、荒地の彼方にオアシスがあり、その命の水を飲めば私達は新しい試練に立ち向かう元気を得る。

恐ろしい苦闘や暗黒勢力との戦いの記憶は、この世を去る時まで私達の心に残り、私達と共にあの世に移っていく。その時の暗い気持ちと孤独感の記憶がよみがえり、人間が初めて己の魂を面と向かって見る高所のひっそりとした風景を思い起こす時には、思わず身震いがする。人間は自分の魂の偉大さに直面した時に、理由もなく恐怖し、振り向いて逃げようとするが、結局、自分自身から逃れることができないことが分かる。自分自身は至るところにいるからである。

物質界での存在は暗黒である。物寂しく、冷たく、濃い暗黒であり、それが言葉で表現できない孤独感のとばりに包まれている。魂は目が見えない、助けのない、傷つきやすい赤ん坊のように、その暗闇の中をよちよち歩き、昔聞いた忘れられない美しい声を探し回っている。この生き地獄こそ生命の神秘である！ 肉体の苦痛は一種の地獄だが、飢える魂にとって自分の渴望が作る地獄と比べれば肉体の地獄など喜びのようなものである。もちろん、魂の苦悩も過ぎ去っていくものだが、でなければ、不死の魂でさえもその外的な火の激しさで枯れてしまうだろう。そして魂の苦痛が過ぎ去ってしまえば、苦勞して勝ち得た平和がやって来るだろう。それはもろもろの魂の間の偉大な同胞愛という平和である。だから、待つことを学べ。待つことほど厳しい教訓は他にない。

人間の魂は、木の中に閉じ込められた魂のように、生を与えてくれる死を待ちながら生きている。木は枝が風に揺れ頭は天を仰ぎ、根は黒い土に下りる。吹き荒れる暴風に持ちこたえ、土にかがむが、決して倒れずに永年に待ち続ける。つまり、きこりの斧や職人の旋盤、素晴らしい楽器として木材を活かす名工の手を待っている。木から出来た楽器の美しいリズムや、感情のこもった静かな調べ、元気づける音調は、全国民に涙を催させるし、軍隊に愛国心を吹き込むことができる。

生きている間、生息環境で自然な機能を果たしながら、木は自分の可能性を夢に見ることができようか。一般的に言えば、私たち人間は木よりも賢いものだろうか。

創造主の手は私たちの上にあり、私達の性格の緩んだ弦を締め、調子を合わせている。そこかしこに創造主の偉大な職場から、ほとんど完成された楽器の二、三の音が聞こえてくる。たまに、調子を合わされたいいくつかの弦の美しいオクターブが世界に響き渡る。しかし、大いなるオーケストラの指揮である大師は、宇宙的な賛美歌が全世界に鳴り渡るために必要な数の演奏者たちを、今もって待望している。

第三章 感覚と接触

簡単な事、簡単な言葉、日常生活の簡単な行いには、数えようもない宝がある。この宝の中に、あらゆる霊の花々を生み出す種の最初のほのめかし、最初の動きがある。その種こそは、永遠の生命の種である。

「感覚を殺せ」とは、オカルティズムの最も重要な規則の一つ〔注18〕だが、一般の人にとってきわめて分かり難いものである。なぜなら、感覚を殺せば生命そのものを失うことになるからである。生きるとは物に接触し感覚することなので、接触と感覚がなければ意識もなくなるだろう。

しかしこの規則の言う「感覚」とは、人間を一定の振動率に結びつけ束縛する一つの運動様式である。そのように束縛された人は、より高い振動率を持っている真^{まこと}の生命という未開の世界へと進めなくなるし、飽き飽きさせられるまで、踏みならした例の道に戻らなければならない。今生という分化した一つの命の振動を呼び起こした最初の刺激が与えられて以来、人は決まりの道を歩むし、刺激が尽きて人格我〔注19〕がぬれた落ち葉のように川底に沈むまでにその道をたどり続けるだろう。

感覚は発達のために利用されるべきであり、墮落のために誤用されるべきではない。各々の感覚は、客観的な立場から研究観察する必要がある。つまり、人間は自分の意識を感覚器官から離し、まるで他人を観察するかのように自分自身の感覚を見なければならぬ。人間がこの世で楽しみや喜びと思っているものはすべて、相応したものが他の世界にもある。楽しみは次第に浄化され、低級世界の付き物であるカスがとられてしまう。そして、人は「我」^{われ}がなくなった平均点に到達すれば、低級な感覚を観察して得た教訓によって新たな光輝すなわち新たな振動に結びつくであろう。その時、彼は新たな振動のために、自分は宇宙の意識的な創造者・創造力であることを悟る。

低級な感覚に飽満する意志薄弱な者は、決して女神イシスのベールを上げ、彼女の手から山門の鍵を得ることはできない。しかし、高級な意味の「享楽主義者」でなければ、彼方に喜びの高所があることに気がつかないだろう。そのような人だけは、十分に力を身につけると喜びの高所を登ろうと試みることができる。

昔から神秘主義の多くの学徒は「感覚を殺せ」を発達の方針としてきたが、結局、心の諸力を内にせき止めたにすぎなかった。ところが、そうした学徒が厳しい試練を受けた時、諸力はあらゆる防壁を突き抜け、学徒を激情の渦に押し流すか、彼の肉体の五官を破壊するかである。この規則の精神は正当であり実現可能ではあるが、現代の一般の人はこれを実践しようとするれば、男女問わず、重大な危険を冒すだろう。私はこのことを言って悪徳を正当化しているのではなく、自然な生活を送るように願っているだけである。

あちこち散在する東洋の大記念碑やエジプトのピラミッドのように、たいへん苦勞して喜びの高所に登った偉人の名前がそこに残っている(これは逆説的に思われるかもしれないが、苦を通して楽を得ることができるし、楽を重ねると苦になることもある)。私達の導きのためにこれらの偉大な魂の持ち主たちは、自分が上った道に道標を残してくださった。その道標の一つには、「無恐怖」が火の文字で刻まれている。

高度な発達のために苦闘している人は、恐怖によって魂が麻痺し得る限り、先に一步も進むことができない。そうした探求者は、果てしなく広がる高所には、登頂に失敗した人々の灰がまき散らされることに初めて気がつく^{なだれ}と、雪崩に似た深い恐怖感に襲われ、獵師から逃げる鹿のように素早くより低い段階へと逃走してしまう。しかし、もうすでに麓^{ふもと}の牧場で十分に草を食べてきたので、魂の観点から見れば全く空しい所である。

勇氣ある探求者は、崖っぷちに生える松の木のようにである。松は暴風に震え身をかがめながら、ますます深く根を下ろす。探求者が、一本の松のように自分の力に自信を持って独りで立っているうちに、嵐は徐々に静まってくる。そして、ある日、心の和みが深い川のように彼の魂の上にとどくと流れ、彼の心は万物の意識に満たされるだろう。

彼は命の梯子を一段上ったにすぎないが、一般の人たちよりもはるかに進歩している。まわりの人々はもはや彼の言動を理解できなくなっている。彼は聖別されたもの^{みちしるべ}のようである。彼にとって恐怖感^{みちしるべ}はもはや存在しない。恐怖の振動率(vibratory tone)は変わり、「無恐怖」になっているからである。彼は「活動」という文字が刻まれたもう一本の道標を見る。そして清浄さという衣を肩にかけ、暗闇から人生の輝きへと出て行く。

彼の目はもはや束縛されない。彼は愛する女性の目の中に光を見て、それは清い魂から輝き出ることが分かる。そして、彼は二人の邪魔となった情欲を後に残し、彼女の手を取って言う、「次の一步を共に踏み出そう」。情欲という感覚が純粋な愛に変えられたために、彼は自分自身の魂を面

と向かって見えた。なぜなら、愛だけが人間の魂が住む神殿に導いてくれるからである。愛は「接触」をつかみ、宇宙の戸を叩く。「感覚」はそれに反応して、戸を開いてくれる。

様々な自称オカルティストたちは、ありとあらゆる感覚と情緒を区別なく非難しなければならぬと勘違いして、多くの学徒を迷わせてきた。学徒は、その教えと、感覚は生命であるという直観的な知識とを一致させることができなかつたからである。偽の師匠たちについて行こうと努力する人たちは、計り知れない害を受ける。その人は、五官が一時萎縮するか、普通の感覚からほとんど刺激を受けない精神的に不活発な状態に陥るからである。

自然な人間なら、何かの快樂に引きつけられると、いわば二杯目を飲む時に一滴の毒の味を感じるだろう。しかし、その毒を注意深く調べたら、その中に解毒剤を発見するし、より高い樂とそれに相応する苦との鍵も見つけるだろう。

「苦しむ人々よ、その苦しみを引き起こしたのは自分自身であると知れ！」自分が他人のために苦しむという間違つた考えを捨てよ。各自を支配する内なる自我は、苦や疲労は樂や元氣の良さと同じように成長に必要なものだという真理を認める。内なる自我は、いわば大なる樂器に手を伸ばし、必ず不調和に響き渡る音を鳴らす。自我は自分のオーラの他の色に調和しない色彩を発すると、薄暗い色が見えてくる。内なる自我は、自分自身の一断片である他人に言葉をかけ、目をやり、そして根拠もなくその人を咎めることがよくある。自分の実験の主な原因と結果は、自分自身の感覚欲だと必ずしも分からないからである〔注20〕。

第四章 永遠なる愛

ある日、愛する、そして愛してくれる人の胸に頭をもたせかけると、ほんの一瞬魂の目が開き、「永遠なる愛」を垣間見ることができる。そして、その後の人生は決して元通りにならない。愛の豎琴の弦に触れた私たちは、他のすべてのものを不調和に感じるにすぎない。おそらく、この一生に私達に与えられるのはその一瞥いちべつだけだが、それさえあれば、低級な段階の踏みならされた道を抜け出し、永遠の生命に至る上り坂に足を踏み入れることができる。魂の清浄で静かな世界を一瞥したおかげで、私達は荒野で声を上げる子供〔注21〕のようになっている。しかしその子供は、確かに父親の顔を見たことがあり、どこかに我が家があり、いつか平穩が訪れることを知っている。

何と哀れなことか！ 人間は「現実」と思っているものを探し求め、現実のために奮闘し努力するが、魂の認識 (soul-perception) に至る唯一の門である「想像力」を閉じてしまう。人間は必死に汚

れた衣にしがみつきのながら、まことの自我は衣ではないし、決して目に見えるものではないという真実を完全に忘れている。

あなたは、いちばん愛する人の心さえ知らないのである。その心を自分なりに評価し、自分には認識し得る最高の美・誠実さ・堅固さ・清浄さをその性質と考える。

外形である体というものが亡くなっている、内なる自我はどんな変化も受けずに残るし、あなたはあなたの理想である故人の魂を愛し続けるだろう。今でもその魂は存在するし、これからも永遠に存在するであろうが、感覚を通してあなたに現れたことがない。にもかかわらず、愛する人の棺を寂しく見つめる人にとって、魂こそ最も生き生きと存在する「現実」である。体という破れた衣は魂ではなく、魂が一時身につけたものにすぎないからである。

間違った動機や不信感、疑いを抱くために、これまで相手の魂の美点だと思っていた特徴は実際にありもしなく、その素晴らしさは自分自身が作った幻にすぎないと迷い込んだ時ほど寂しい時はない。昔、戸が開き、真実で完全な存在という唯一の永遠のものを一瞥することはできたが、すでに戸は閉まり、もはや取り戻すことのできない何かがあるあなたの魂からなくなってしまった。つまり、理想を実現する力、愛する力を失ってしまったのである。

美しさ、強さ、清浄さ、勇気などの特性は愛を呼び起こす性質だが、結局、それらは内なる魂という現実を象徴するものである。いろいろの特性を感覚的に、または感情的に認めたり、冷たい知的な対象として評価したりすることは、一種の偶像崇拜にすぎない。美点のまことの意味を理解しようとする人は、想像力の目でそれを読み取らなければならない。私たちは、魂の想像力に呼び起こされた「幻影」を当てにならない空想と考えがちだが、おそらく真見せかけのものにすぎない外的な「事実」にだまされることが多いであろう。愛は幻影と思われるかもしれない。この世において「愛は盲目」になってしまうのだろうが、愛そのものはあらゆる世界を照らし、内なる視力にすべての事をはっきり見せてくれる光である。

例えば男性は、自分はこういう人間だというイメージを持っているが、彼を愛する女性の方が彼のことを正しく把握している。もちろん、彼女は彼の偽りのイメージにだまされて愛しているわけではなく、むしろ、彼のいやなところをたくさん知っているにもかかわらず愛し続けている。それこそ神秘である。その意味で彼女は放蕩息子の父のようである。父は息子の墮落した状態を悲しむが、漫遊から帰ってくる彼のほうへ駆け足で迎えに行き、彼の額に口づけをする〔注22〕。

家事で部屋を駆けずり回る女性はつまらない存在のように思えるが、高尚な無頓着をもって恐ろしい未来の顔(これも父の顔だ)に微笑みかけることができるのは、彼女だけである。

神の女性的な側面は魂〔注23〕だが、男性はエゴイズムで目がくらみ、女性の愛が神の愛の道をさし示しているということを忘れてしまう。

男性はたびたび自分の本質の中心につながる道を忘れてしまうが、女性は決して忘れることがない。男性が魂の奥底から来る一語を女性にささやいたら、彼女がどんなに遠く正しい生活からそれ

ていたとしても、まだ記憶に残るあの神秘的な道に戻り、愛の尽きない宝蔵から彼と同じく清い言葉や眼差しを返す。彼女の魂はいわば永遠に門口に立ち、彼の魂の呼びかけを待っている。

愛と欲望の原理がさまざまな行動で現れるが、人間同士の口づけのように多くの議論的となり、大いに好奇心や想像の対象となったものは他にない。口づけは全く人間的な行動と思われているが、それは大きな誤りである。愛する人の唇の接触から来る、心身にしみ込む何とも言えない喜びの震えは、物質に対する「聖なる霊・質料」の最初の作用である〔注24〕。生理学上の描写や、唇の解剖を行っても、口づけの不思議な力は分からない。そして、それは情欲のためのものでもない。

情欲とは、自らの目的を果たすためにどんなエネルギーも我が物にしようとするものであり、キスの力をもつかんで利用するのだが、口づけそのものは決して情欲の道具ではない。口づけの起源は全く純粋なものである。聖書には口づけについての話がたくさんあるので、キリスト教の信者はそれを非難したり冒瀆してはならない。最初の純粋な二つの発散物の口づけによって、最初の息子である光が生まれた〔注25〕。愛と希望の口づけから信仰が生まれる〔注26〕。信仰と希望の口づけから活動が生まれる。創造的な火は、口づけを通してすべての物質を顕現させたからである。

口づけは女性的なものであり、魂のものである。墮落と神聖なものの俗用により、それは情欲の機能となったが、純粋な口づけは人間の体ではなく魂の中に生まれる。

結局、愛とは宇宙の創造的諸力、すなわち顕現した生命の各原子に潜む精妙な火を発動させるものである。消耗し破壊するものとして、それは人間の情欲という火の大蛇になり、焼き尽くす怪物になる。こうした低い段階の作用だけを見れば、愛のエネルギーがいやなものと思われるだろう。しかし、動物的な情欲の汚れを避けようとする人は気をつけたほうがいい。冷たい禁欲主義や自己中心主義に避難所を求め、愛情と友情を入れないように心に封をすれば、押さえられた心は早かれ遅かれ情欲に陥ってしまう。

清められた愛はまことの禁欲主義を生み出すが、抑えられた愛は情欲になる。愛という火的な形成力は、逃げようとする軽率な人を大蛇のように巻きつけ〔注27〕、あがきもだえる魂を引力によってその中心へと引きつける。そして、魂が自らの神聖さを悟り、神聖な本質によって情欲を慈悲に変えるまでに、火的なエネルギーは魂をその中心に引き止める〔注28〕。欲望は、全滅するという意味で殺されるのではない〔注29〕。欲望は、一つの栄光から別の栄光へと変えられるだけである。つまり、自己中心的な欲望の満足の極致から自己犠牲の極致へと変化する。

心身清浄の重要さは、決して過小評価してはならない。しかし、浄化する試みにより、むしろ心を傷つけたり、台無しにしたりしないように気をつけなければならない。このために繊細な識別力は必要だが、それを欠けた人は、無理を避け、普通の自然な方法で進化したほうがいい。自然な生活を送る人の魂は、低い欲望によってほとんど影響されないし、決して不潔にされることもない。

黄金色の「生命の木」は、下界に根が付き、頂が天につき、球のような^{つぼみ}蕾を嵐のさ中に出す〔注30〕。幹は吹き荒む暴風に揺れず、独りで荘厳にどっしりと立っている。その蕾は魂のエッセンスの

最初の現れであり、復活の朝を待ち焦がれている。その朝に靈的^{ひらめき}火の一閃は堅く閉じた蕾の花びらを膨らませ、この世ならぬその美しさと力を開けさせる。

第五章 苦と犠牲

どんな結合にも大きな神秘がある。つまり、結合の儀式を行うイニシエート、大師、僧侶を取り巻く神秘である〔注31〕。結合の法則は、分子にも、星にも、宇宙にも当てはまる。

私が同胞の一人と口づけを交わせば、同胞と私と私達二人の心身を走る愛の震えとがある。震えは情欲ではなく、同胞と私の偉大さの度合いにより単に愛である。しかし、口づけを交わす時には、聖なる法則が働き始める。口づけを通して愛のその一つの震えが犠牲にされる。私が彼ともう一度口づけを交わせば、それは同じ口づけではないし、同じ愛の振動が伝わるわけではない。

東洋の古いことわざによると、苦と楽は等しいものである。これには一種の真実性はあるが、文字通り受け取ってはならない。苦を高めれば喜びと楽しみになることがあり得るし、喜びの結果は苦しくなることもあるが、喜びそのものは苦にはなり得ない。喜びは積極的で、苦しみは消極的である。喜びは自然な状態で、苦しみは不自然な状態である。低級な諸世界においてだけ両方は必要だが、それらの世界には苦のほうがもっと必要である。苦が作る状態は、喜びの現れのために必要だからである。

苦は熱を起こし温度を上げると、低級で粗大な分子は熱の振動の中で創造的な火によって破壊される〔注32〕。あるいはむしろ、分子が「物質の臨界状態」といえる別の状態に変えられてしまう。臨界状態から、別のエネルギー（それも一種の「火」である）との融合により、もう一つの世界が生まれてくる。それは異なった物質状態であり、五感に認識される物質の形成に大きな役割を果たす状態である。以上は苦のただ一つの神秘だが、ここでは苦の助手である「犠牲」が紹介される〔注33〕。

犠牲がなければ、分化した生命はあり得ない。「一つとなった二つ」が生まれるためには、「一」は亡くならなければならない〔注34〕。古代の諸民族はこの法則を理解して神々に^{いけにえ}生贄を捧げた。

苦と犠牲は一つの「現実」の二つの面であると度々言われてきた。これは高級な諸世界に関しては正しいが、分化した外的な世界での真実を十分に伝えていない。靈的意志は苦痛と一体となることによって苦の低級な面を犠牲に変えるからである。すると、意志はこの活動によって呼び起こされたエッセンスを苦に与えるし、同じようなエッセンスを苦から得る。^{まこと}真の犠牲とは、このエッセンスすなわちこの甘い香りであり、捧げ物や生贄を捧げる石や儀式などではない〔注35〕。

東洋の教えを解釈するにあたって、大きな誤解が起きている。多くのいわゆる「オカルティズムの師匠たち」の思想は、低級な分化した世界から無限なる「一者」という均質の状態へといきなり飛んでいく。絶対的一者〔注36〕についての真理を述べ、物質の究極的な状態について正しい概念を人間の制限された知性に伝える必要はあるものの、物質のさまざまな中間的状态の性質を強調することはさらに重要である。私達人間はこれらの中間的状态に存在するからである。究極的な状態に到達すると、個別の存在のすべては一者に融合する。あらゆる犠牲の儀式が行われるのは、低級な世界においてである。

永遠の息子は永遠の母の子宮に入ることにより、犠牲になる。この息子を「多くの兄弟の中で長子とならせるために」〔注37〕、神は生贄^{いけにえ}として自分を自分自身に捧げる。神は自分自身を犠牲にしななければ、創造が少しも展開しない。世界が進化する周期の初めに、最高の霊的世界でこの犠牲が行われるが、その後も各世界で同じことが繰り返し行われる。これは無限者から大周期の最後の息子の誕生に至るまで行われる過程である。

これは、幾何学的に言えば引き伸ばされた等辺形であり、まことの「生贄の石」である〔注38〕。もろもろの火による真^{まこと}の命^{いのち}の種^{たね}の燔祭^{はんさい}が順番にその「石」の上に捧げられるからである。最初の火が霊的世界で灯され、最後の火は「動物の世界」で灯される〔注39〕。もろもろの火とは互いに別々のものではなく、唯一の火である「愛」のさまざまな側面である。神は愛であり、「焼き尽くす火」でもある〔注40〕。

昔の性器崇拜の儀式を霊的なシンボルとして理解すれば、間違いはない。しかし、古代の人々はその象徴的な儀式を好ましくない状況の下で物質的なものにし、不自然で邪悪なものに変えて罪に陥った。結局、最低な官能的行為や、自然の法則を犯すひどい犯罪が生じた。このようにして、すべての偉大な霊的真理は引きずり下ろされ、動物的な情欲の泥で汚されてしまった。その結果、人間は今のような柔弱な動物に成り下がった。

「犠牲」というと、人間はいつも「苦しい」「つらい」を連想する。人々は犠牲に必ず苦が伴うと信じるが、実はそうでもない。喜びという生贄^{いけにえ}を苦に捧げることがあるように、苦を喜びの生贄にすることもある。後者の犠牲の香りは前者と同じように芳しいのであり、同じように貴重で神聖なものである。

問題は、人間には自分の苦難と苦痛に対して不思議な愛着がある。苦が自ら消えていこうとするのに、私達はそれをぎゅっと抱きしめ、放そうとしない。私達人間は「善行」と思っているもののために犠牲を払った時に、無意識のうちに自分を被害者と考え始め、自己憐愍に陥ってしまう。いわば神々に「私はあなたの方のために犠牲にしたものを見てごらん！」と言うが、ほとんどの場合には私達が放棄したものはゴミも同然であり、心身の成長を妨げる邪魔物である。こうした「大いなる犠牲」に相応な酬いをもらわない時に私達は声を上げ、「誰も私を認めてくれなかった。犠牲を払ったのに、無駄だった。この後、犠牲などをすべてやめて、できるだけ楽しい生活を送ろう」と断言する。その

時にこそ偽りの犠牲を放棄することによって、まことの犠牲を捧げるようになった。つまり、自分自身に自分を犠牲にした。

与える人と受ける人とが同等でない限り、喜びという神聖な至福と心の和みは、与えることから来て、受けることから決して来ない。しかし、ほとんどの人間の場合、与えることから、与える力についての利己的な理解が生まれ、そして与えるという神聖な権利が物質的になり、低くかつ暗くなる。すると、与えようという気持ちは受けようという飽くことを知れぬ渴望に変わってしまう。その欲望が満たされるたびに、与えようという本来の熱望がますます歪曲され、ついにその人の全性質がゆがみ、曲がってしまう。正しく与えるという神聖な力は永遠に失われると、底知れぬ欲のエゴイズムが生じる。利己心の諸力は、獲物に巻きつくコブラのようにその人をますます厳しく押さえつける。結局、エゴイストはこの世に生きながらも魂のない抜け殻になる。彼は、形は人間だが、人類の霊的な遺産の分け前を持っていない。

第六章 小さなことの方

一種の人間にとって細かなことに関わることはきわめて耐え難いのだが、チェスの選手が試合に勝つためにポーンやナイトという価値の低い駒を役立てるように、細かいことを把握してうまく利用する人だけが、まことの「無尽蔵の力」に手を伸ばし^{つか}掴むことができる。小さなことに対する支配力こそ、大きなことを支配する力を与えるからである。

霊的な世界に生きるために、絶えず全ての優しさ、全ての清浄さ、全ての愛に接触しなければならない。キリストの「小さい者たち」[注41]の最も身分の低い者に対しても冷たくて、不親切で、利己的な態度を示す人は、自分自身のオーラの中にキリスト・エネルギーの流れを妨害し、その潜在力の実現を不可能にする。

日常生活のストレスには、些細なこととは言え、人が自分のまわりに建てた防壁を取り壊す力がある。繰り返し心に打撃を与え腐食させる小さな悩みや苦勞は、道のない山の蔓やイバラのように生い茂る。旅人はトゲに刺されたり、足を取られてよろめいたりし、立ち往生して絶望的になるだろう。小さな悩みの嵐に続く沈黙の中で魂は裸になる。だから、ストレスに対する魂の態度を見て、いちばん正確にその偉大さを評価することができる。

勇気を出して自分の心の中の野獣と戦うために砂漠や山に行く人は、人々に「英雄」とみなされ、勝ち取ろうとする力を受けるにふさわしいと思われるだろう。しかし、人間同士に囲まれて暮らす時には泥沼のように足を動けなくする日常生活の小さな試練に打ち勝てなければ、彼は内なる野獣

たちを決して克服することもできない。他人と同じ長所と短所が必ず彼自身の性格の中にあるからである。彼と他人との摩擦を生み出すのは、さまざまな原因の衝突だけである。

「神殿」のような崇拜の対象や、義務感を満足させる道などの最重要なことを探し求める時には、人類は個人の視点から遠い「天」のようなものに目を向けがちだが、この傾向の理由はあまり分かりやすいものではない。それは、忘れられた時代の名残である。その時代には、人類とその起源の間にもっと広い隔たりがあったし、進化の天秤はまだ新しい方向に向き直っていなかった〔注42〕。しかし、まことの霊的教えのすべては、人間の内にある神について教えているし、兄弟・隣人・友人に対する義務を断言している。

外で見るものは、必ず内にもある。手近な所に、つまり自分の家庭や交際範囲には、正すべき不正があり、苦しんで癒しや慰めを必要とする人がおり、指導を受けるべき子供がおり、そしてもっと広い意味で言えば、まだ普遍的な愛の振動に調子を合わされていない同胞愛の堅琴の弦がある限り、そこにこそあなたの義務がある。もしあなたの存在と力と影響が他の所に必要だったとすれば、すでに自然の成り行きでそこにいたか、あるいは、いつ誰に影響と献身を与えるべきかということが疑いの余地もなく理解されるようにあなたの状況が調整されていたか、どちらかである〔注43〕。

それが荒れ果てた寺院の文庫に積み重なった羊皮紙に書かれていようと、地下の秘伝室の壁に刻まれようと、古代の偉大な叙事詩と記録のすべては大戦について語っている。天使と悪魔の戦い、地水火風の戦い、霊と物質の戦いという、敵を全滅させるまで絶え間なく続く永遠の戦争である。いやがおうでも、人間は生まれ変わるたびにこの戦いに参加しなければならない。各自は一方の側につき、最後まで戦わなければならない。

戦いを避ける者は、何も得ることができない。逃避によって自分自身の高級我を裏切り、自然の力を支配する能力を身につける機会を逃した人に、自然そのものは物質界での単なる生存競争の戦いをさせる。そのように身分と力を失った場合には、内なるまことの自我である「戦士」と低級な人格我との一時的な分離が起きる〔注44〕。戦士の心にはいかなる動揺も臆病も利己心もない。勝ちたいという強い願望と、決して失敗しないだろうという、疑う余地のない知識があるだけである。

内なる戦士を探すために、低級な人格我は気をつけの姿勢でいなければならない。物質界で長くこの姿勢でいるのは疲れるように、魂の世界でもそうである。長い間見張りを続ければ、疲れ果てた心身は人生の浅瀬で水浴びをし、緑の波のようまことにうねる草原で遊びたくなる。これらの幻影は美しくて平和そうだが、まやかしにすぎず、魂すなわち真の戦士にはどんな平和も与えない。安楽という麻薬に酔いしれ、くつろぐために鎧を脱ぎ捨てた兵士は、自分がかつて呼びかけ、永く待ち焦がれた真の戦士を見逃してしまう。というのも、本当の知識の回路が作られていなければ、兵士の呼びかけは戦士の耳に届かないからである。すると、兵士は来るべき戦いのために慌て、五感の熱病でよろめき、倒れてしまう。友と敵を区別することできなくなった彼は、日の終わりに戦場で倒れた死体となり、死屍食の猛禽の奪い合いの対象となっている。

しかし、ひとたび兵士が戦士を見つけ、あるいは戦士に見つけられ、戦士と一体となると、不安はいつさい消えてしまう。その時、永遠の真理を悟り、戦場の背後にある果てしない「父なる愛」の原因と目的を確実に知り、どの打撃も外しはしないという生きた確信をもって軍旗を掲げる。「勝利、勝利、勝利！」という軍旗を。

注

〔注1〕 人間の心の「自然な部分」は本能である。それには、自らを浄化し高めることによって神聖なものになろうとする本能が含まれる。動物・人間が神・人間になるということは自然な過程だが、この過程は意識的な努力を必要とする。

〔注2〕 『ヨハネによる福音書』一四章六節。

〔注3〕 『創世記』三章二四節。

〔注4〕 『マタイによる福音書』六章一〇節を参照。

〔注5〕 この本が発行された一八九九年の前に、H大師はメイベル・コリンズを通して、『道の光』『白蓮物語』『黄金の門をくぐって』という三冊の本を伝えた。

〔注6〕 B. S. はブルー・スター（青星）の略体。H大師が「人民の寺院」の創立者フランシア・ラドゥー夫人に授けた名前。

〔注7〕 ここで言っている「キリスト教（Christianity）」は宗派的なキリスト教ではなく、すべての宗教の基にあるキリスト（救世主）の教え。

〔注8〕 「この周期の初期と中期」は、西洋史の中世と近世の前半とをさす。

〔注9〕 キリスト教史は三世紀以来犯罪でいっぱいだが、特に十字軍の頃から恐ろしい虐殺や黒魔術が増えた。十五～十七世紀に宗教裁判の魔女狩り、宗教改革運動に関わる衝突、イエズス会の陰謀などを目撃して、多くの知識人は宗教や信仰そのものを抑えなければならないと結論した。この思想は、十七世紀の近代科学の誕生や十八世紀の啓蒙運動につながり、十九世紀の唯物論に至っている。H・P・ブラヴァツキーが指導した神智学運動の一つの目的は、この懐疑論的な思想によって起こされた不均衡を直すことであった。

〔注10〕 この文章が書かれた頃、スペイン（イグナティウス＝デ＝ロヨラの誕生の国）と合衆国が米西戦争（一八九八年）で戦っていた。古代の真理とイエスの真理の共通の敵の名が述べられていない。

〔注11〕 「アデプト」は大師および大師の高級な弟子である。文字通り、秘められた科学にadept (達者な)人である。

〔注12〕 質料(substance)は世界・物を構成する物質・素材である。物質界の質料と比べてメンタル界の質料は精妙で振動率が高い。

〔注13〕 物質界・アストラル界・メンタル界という顕現の世界は絶え間なく移り変わっているので、そこにあるのは永久的な「本質」ではなく、常に変わる諸エネルギーの相関関係(correlation of forces)である。例えば、人間の肉体は生物学の観点から見れば有機体ではあるが、究極的には、さまざまな化学的・物理的エネルギーの相関関係でしかない。一方、無限者の火と一体である火花として魂は永続的な存在だが、この世で働くために魂は諸エネルギーからなっている媒体(肉体・アストラル体・メンタル体など)が必要である。

〔注14〕 『ルカによる福音書』二章一四節。イエスの誕生を発表する天使の言葉である。

〔注15〕 東洋人と西洋人は両方とも、政治、倫理、宗教の分野で自分が作った形態(組織、習慣、戒律など)の奴隷と被害者となっている。しかし、人間の意識が拡張するにつれて形態の質を高めて作り直す必要がある。そのために、人間は形態の本質を同化し、形態を構成する精妙な存在(エレメンタル)を支配するだけの知識と力を持たなければならない。

〔注16〕 『マタイによる福音書』二五章七節を参照。

〔注17〕 『ルカによる福音書』七章四七節。

〔注18〕 『道の光』第一部六節は、「感覚欲を殺せ」。

〔注19〕 「人格我」は神智学用語であり、一つの生まれ変わりの間中だけに現れる人間の身体・気・感情・知性をさす。特に「私は鈴木花子だ」という一時的な自己認識。人格我は不死の魂と違って、死に際して漸次分解していく。

〔注20〕 ここで言う「内なる自我」は、未完成な魂(マナス)である。ある観点から見れば、この世での肉体化身の連鎖は、マナスの実験である。マナスは感覚欲に駆られ、外界での経験を求めるからである。自我は、苦しい経験を受ける時に他人のせいにしがちだが、実は進化のために自分自身が求めたものである。すべての人間のマナス(知的本質)は宇宙のマナス(マハット)から生まれるので、他人は自我の「一断片」といわれる。

〔注21〕 『イザヤ』四〇章三節、『マタイによる福音書』三章三節、『ヨハネによる福音書』一章二三節などを参照。

〔注22〕 『ルカによる福音書』一五章一一～三二節を参照。

〔注23〕 ギリシア語の「プシュケ(魂)」は女性名詞で、エロスに愛された美少女として擬人化された。

〔注24〕 聖なる霊・質料は、父母スヴァバヴァットであり、陰陽、宇宙の母体である(『シークレット・ドクトリン』宇宙発生論スタンザⅢを見よ)。それが物質に作用すれば、宇宙が生まれる。おそらく、聖母マリアが受胎告知の時に渡された白百合は、この口づけと同じ象徴である。

〔注25〕『創世記』で、「大風が水のおもてを覆っていた」後に、光が生まれる(一章二～三節)。大風が「神の霊」と訳されることもあり、水は質料・物質の象徴である。「覆っていた」を「吹きつけた」と訳することもできるが、ここで風と水の接触が口づけにたとえられる。

〔注26〕『コリント人への第一の手紙』一三章一三節を参照。

〔注27〕日本ではこの真理は、娘が蛇体となって道成寺の鐘を巻きつけ、そこに隠れた山伏を焼き殺す伝説で表現される。『シークレット・ドクトリン』宇宙発生論スタンザ五で、愛すなわちフォーハットは、「火の竜巻」のように螺旋状に動く。

〔注28〕太陽神経叢は下半身をつかさどるエネルギーの中核である。passion(欲望、情欲)にcom(共に、共通の)という接頭辞をつけると、自己中心的な要素がなくなり、compassion(思いやり、同情、慈悲)になる。

〔注29〕H大師がメイベル・コリンズに伝えた『道の光』には、「野心を殺せ」「感覚欲を殺せ」などの規則がたくさんあるが、「殺せ」とは、より高い指導率に変質させることである。

〔注30〕『沈黙の声』第一部、七七～七八を参照。

〔注31〕「イニシエート」は、秘伝(イニシエーション)を授ける高位の方、及び秘伝を受けた人を意味する。

〔注32〕「粗大(coarse, gross)」は「精妙(subtle)」の反意語で、高い振動率のエネルギーの媒体にならない、比較的物質的なものをさす。アストラル体の七感とその対象と比べて、肉体の五感とその対象は粗大である。

〔注33〕この例は具体的な物質に触れないので、分かり難い面もあるが、全体として次の意味である。熱を出すと苦しいが、有害な異物を殺すために体温を上げることは必要である。そのように殺されたウイルスなどを構成する分子が分解され、その物質はもっと精妙な世界において熱ではない別のエネルギーと結合し、役に立つ新しい状態の物質としてリサイクルされる。『リグ・ヴェーダ』などでアグニ(火、火の神)が司祭とよばれるように、ここで苦の火が生贄いけにえを行う司祭にたとえられる。「犠牲」は苦のcoadjutor(助手、特に聖職者の助手)とよばれる。

〔注34〕「一つとなった二つ(the two-in-one)」は陰陽すなわち父母、霊・物質であり、「一つ(the one)」はそれを生み出す太極である。

〔注35〕『バガヴァッド・ギーター』三卷一三節を参照。

〔注36〕形而上学の一者(the One)は万物ではなく、万物の究極的な起源であり、絶対的に完結した全である。

〔注37〕『ローマ人への手紙』八章二九節。

〔注38〕理想的な世界の等辺形は、顕現の世界では辺が引き伸ばされる。正六面体を開くと、4:3という比率で縦軸が横軸よりも長い十字架になる。『シークレット・ドクトリン・宇宙発生論[上]』四六四～四六五頁の「マハー」の説明を見よ。

〔注39〕「動物の世界 (animal plane)」は「動物界」という意味もあるが、ここで「肉体のある世界」「感覚と活動の世界」というニュアンスである。

〔注40〕『申命記』四章二四節によると、「あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である」

〔注41〕『マタイによる福音書』一〇章四二節、一八章六、一〇、一四節を見よ。

〔注42〕アトランティス時代の中間期までに、進化の自然な展開は、霊から物質へという振動率を下げる方向であった。いわば「周期の下り坂」では、一般の人類とその起源(天、神)との間の隔たりが広がっていくことは自然なことであった。中間期から、放蕩息子の帰郷に象徴される「霊への帰還」が始まった。

〔注43〕一般的に言えば、人の現在の状態は彼の成長にいちばん相応しいものだが、もちろん状態を変えたほうがいい時もある。後者の場合には、カルマや大師方はその人の状況を調整し、彼の足を新しい方向へ向かせるが、本人は変化のしるしを正しく読み取り、疑わずに進まなければならない。

〔注44〕戦士について『道の光』IIを参照。

訳者解説

訳者解説

本書が書かれた背景

本書を読まれた方の多くは、神智学についてはご存知かもしれませんが、人民の寺院(The Temple of the People)についてはほとんどご存知ないのではないのでしょうか。『マハトマ・レターズ』〔注1〕を読むと、ブラヴァツキーやオルコット大佐以外に会員の誰にも知られていない「ギリシア人の同胞」の活動があると、M 大師が書いています。この同胞は、エーゲ海の島に生まれていたといわれるヒラリオン(H 大師)です。1880年代に『道の光』と『白蓮物語』をメイベル・コリンズに口述した方として、ヒラリオン大師が世に知られるようになりました。〔注2〕

1875年H・P・ブラヴァツキーとオルコット大佐によってニューヨークで設立された神智学協会は、1895年にはジャッジ派やアニー・ベサント派の仲たがいによって次第に

分裂していきました。団結の中に力があると言われるように、バラバラになった協会では世界の統一を願っていた大師方の先兵として働くことが難しくなっていました。そして、その代わりとして人民の寺院が 1898 年にニューヨーク州の北部でフランシア・ラドゥー夫人とウィリアム・ダワー博士〔注3〕によって設立されました。

フランシア・ラドゥー夫人は 1849 年シカゴに生まれ、4歳の時に家族と一緒にニューヨーク州シラキュース市に移りました。彼女は 16 歳で結婚しましたが、間もなく離婚し、またラドゥー氏と再婚しました。1894 年に彼女はダワー博士が指導した神智学協会シラキュース・ロージに入会しました。

人民の寺院設立のきっかけは、1898年9月に彼女はある紳士から連絡があり、ニューヨーク州西部に住んでいた共通の知人の家と一緒に訪ねるように頼まれたことから始まりました。恥ずかしがりやのラドゥー夫人は、数時間に及ぶ旅をその立派な紳士と共に列車の特別室で過ごし、哲学や政治など多岐にわたる彼の話を静かに聞きましたが、大変感銘を受け、家に戻ったらその方の言葉をノートに書き留めました。

その後、その紳士は自分が聖白同胞団のメンバーの一人でヒラリオンという者であり、これから新しい団体を作りたいと彼女に打ち明けました。このとき列車の中で語られた大師のお言葉をまとめたものが、1899 年に本書『かがり火』としてアメリカで出版されました。

人民の寺院は、1903 年にカリフォルニア州のロサンゼルスとサンフランシスコの間にあるハルシオンというのどかな町へ本部を移しました。そこで、大師の教えをもとに神秘学の研究と博愛の実践を目的とする共同体が創立されました。そのパンフレットに「寺院の礎は宗教・科学・経済学である。真の宗教には科学的な基礎がなければならぬ。そして、正しい経済制度の基には、宗教的な科学と科学的な宗教はなくてはならない。故に、この三つの側面はすべて重要である。」と書いてあります。ダワー氏は医学博士として、当時すでに蔓延していた麻薬中毒および結核や神経病などを治療する療養所を設立しました。一般の医学と共にホメオパシー、整骨療法など代替医学が応用され、特に電気を通す療法が施されました。ハルシオンで育ったラッセルとシグールド・ヴァリアン兄弟とその友人ジョージ・ラッセル・ハリソンは、小さい時から寺院で電気を勉強し、後にスタンフォード大学とマサチューセッツ工科大学で著名な研究者および発明家となりました。農業にも新しい技術とアプローチが応用され、代々木公園ほど広い土地を共同で耕しました。また、「この世の範囲を超えた世界へと導く」として芸術が尊ばれ、独特なテンプル陶芸ができました。寺院は、有名な神智学的な画家

でアグニ・ヨガの創立者であったニコライ・レーリヒと友好的な関係を持ち、四代院長ハロルド・フォルゴスタインが書いた数多くの絵はレーリヒの影響を反映しています。

これらの様々な活動の背後に、毎週ラデュー夫人が大師方から授かった教えのインスピレーションの種がありました。H 大師の他に M 大師、KH 大師、C 大師から受けた導きの言葉の一部は機関誌「テンプル・アーティサン」に連載され、後に『寺院の教え』(*The Teachings of the Temple*)という三巻の本として発行されました。短い「レッスン」で「神聖な科学」の理論と実践、経済や倫理、治療や心理学、政治や教育など幅広いテーマに関する大師の直接の教えが伝えられて、初代神智学の文献とアグニ・ヨガ叢書に匹敵する重要な資料と思われます。その他に『シークレット・ドクトリン』と同じく、「ジヤーンの手紙」の抜粋とフランシア・ラドラーやH大師による注釈で構成された『テオジェネシス(神格発生論)』(*Theogenesis*)が出版されました。『シークレット・ドクトリン』の続編とも言うべきこの本のテーマは、人類の未来について、第六根本人種〔注4〕以降の人間の進化、人間が神になる経路について書かれています。

1899年に『かがり火』が出版された翌年、最後の「大師の手紙」がアニー・ベサントに送られました。その中でKH大師は、神智学協会は宗教団体になってしまっていると警告されました。そして十年もたたないうちに協会は、アニー・ベサントとC・W・リードビーターに見いだされたクリシュナムルティの崇拜へ陥ってしまいました。

本書は、神智学協会が激動の時代の中でその本来の目的を見失う中、H大師による新たな団体、人民の寺院の活動の指針となりました。また、20世紀から現代まで混乱の時代を生きる人類に、H大師から送られた貴重なメッセージともなっています。

〔注1〕M 大師からの『大師の手紙』48番によると、「神智学の太陽は、一部ではなく全人類のために輝かなければならない。この運動には、あなたには少しも知られていない活動はたくさんあり、神智学協会の仕事は世界の各地域にひそかに進んでいる似た仕事につながっている。協会の中にもギリシア人の同胞に監督されている部門はあるが、ブラヴァツキー老婆とオルコット以外にそれは会員の誰にも知られていない。」

〔注2〕ブラヴァツキー夫人は1860年からヒラリオンに知り合いました。彼女のスクラップブックによると、1875年にヒラリオン大師はアトリア大師と共にボストンとニューヨークからカリフォルニア経由で日本に行きました。(『ブラヴァツキー文集』1巻90頁)

[注3]ウィリアム・ダワー博士は1866年にニューヨーク州シラキユース市にドイツ人の移民の息子として生まれ、1891年にシラキユース医科大学で医学博士の学位をとりました。1892年に後でニューヨーク大学の一部となった病院で研究した時に、ダワーは神智学協会アメリカ・セクション長のウィリアム・ジャッジと会って、同年の夏に協会の秘教部門に入りました。ラドゥー夫人が活着している間、ダワー博士は寺院の様々な活動を管理し財政を処理する役割でしたが、1922年のラドゥー夫人の逝去後、院長になりました。1937年のダワー博士の死後、妻パール・ダワーは院長になりました。

[注4]神智学の人種論によると、数千万年に及ぶラウンドという長い周期の間、七つの根本人種 (Root-race) が現れます。現在は地球の第四ラウンドであり、今の人類は第五根本人種に属するものです。各根本人種は七つの亜人種 (sub-race) から構成され、ヨーロッパ人は第五根本人種の第五亜種であると言われます。次の亜種の肉体的な進化はすでに米州で始まっていると『シークレット・ドクトリン』は教えますが、第六根本人種の精神的な準備も始まっていると思われます。第六人種の時代には、現在の人種で発達した論理と分析的な能力は直観や統合力と調和するので、より均衡をとれた人類の「平和と文化」の時代になると予言されています。

本書の内容について

本書の前半では当時の世界情勢が述べられ、今後世界大戦が起こるだろうということが予言されています。そして、このように乱れた時代に私たちはどのように生きるべきかという問題提起がなされ、私たちの置かれている状況がどんなに危機的なものか、度々警告されます。

20世紀は長い戦争の時代でしたので、国と国の戦いに限らず、様々な戦いが各所で起こりました。M 大師の『この世を越えて』[注5]という本には、人間は常に三つの戦いに巻き込まれているというキリストの教えが書かれています。一つ目は、個人の戦いです。カルマの結果である自分の欲望や悪習慣と戦わなければ、人は健康を害し、健全な人間関係を築くことができません。二つ目は、人間の進化を妨害しようとする勢力との戦いです。人類を正しい方向へ導こうとする大師方がいらっしゃるなら、反対に個

人の利益だけを尊重し、自分だけが得をすれば他の者はどうなってもよいと考える者たちもいます。三つ目は、宇宙の秩序と混沌の戦いです。

戦いは誰にとっても嫌なものですが、本書でも書かれているとおり、戦いを避けることはできません。仮に戦いから逃れようとするれば、その人は自分が進化するチャンスを無駄に捨ててしまうことになるかと忠告しています。私たちがこういった教えを学ぶことができるのも大師方から与えられたチャンスで、それをうまく活かすことができなければ人類の進歩は閉ざされてしまうでしょう。

4章では愛がテーマとなっています。H大師が、「愛によって低級な世界を抜け出し永遠の生命を得るための道に踏み入れることができる」とおっしゃって、恋愛の大切さを強調されていらっしゃるのには興味深いことだと思います。さらに、「清められた愛は真の禁欲を生み出すが、抑えられた愛は情欲となる」と、禁欲に向かいがちな修行者に自然な道を進むよう促しています。

5章では「喜びは自然な状態で、苦しみは不自然な状態である」また「苦は喜びが現れるために必要である」と指摘されています。仏陀は、法句経で涅槃には至福があると教えています。つまり、宇宙の本質は至福で、私たちはそこから離れてしまったので、そこへ戻るためには苦しみが必要であるということです。一般的な感覚として、人は楽しみを求めて苦しみを避ける傾向がありますが、ただ苦しみだけを避けたいというのは正しい考え方ではないと気づかされます。

本書の内容については、何度も読んでいただくことが最良の理解につながると思いますので、簡単な解説で終わらせていただきたいと思います。神秘学あるいはオカルティズムを学ぶ方の中には、霊能力を得たい、神秘的なビジョンを見たいという欲望をお持ちの方がたくさんいらっしゃいます。そういうものに全く価値がないとは言いませんが、大師がこの本でおっしゃっているように、結局のところ自分の日常生活を健全なものにしない限り救いはないのでしょう。

この本は寺院に伝えられた最初の教えとして、これから道を歩む人に向けて語られたものですが、長年神智学を学んできたフランシア・ラドゥーにとっても大変感銘深いものとなったように、どの段階の探究者であっても学ぶことのできる智慧があります。この大師のお言葉が皆様の良き道しるべとなれば幸いです。

2015年9月 ジェフ・クラーク

[注5] アグニ・ヨガ行書の最後の『この世を越えて』(Supermundane)1巻161号を参照。